また、市太郎は自分の家を塾にして、青年たちに学問を教えました。

市太郎は、ざんねんながら30才という若さでなくなりました。

当時のうるし産業や青年活動にとって大きないたでであり、たいへんおしがられたということです。

(4) 佐藤正治

明治22年（1889年）～

昭和42年（1967年）

現在の丸正石材株式会社を始めた人で、荻野の商業、工業をさかんにするために功績を残しました。

荻野は、鉄道が開通する前は、農家が4軒しかない小さなさびしい村でした。それが今のように大きくなったのは、鉄道の開通と、もうひとつは石材の開発があげられます。

荻野で早くから石材をほり始めたのが、佐藤正治です。正治は、新潟県中蒲原郡大蒲原村の大澤という所で生まれました。正治は、開通したばかりの岩越鉄道（今の磐越西線）を列車で通ったとき、荻野に緑色をした石があることを知りました。そのあと、舟に乗って調べ、この石がたくさんあること、建築材として役にたつことをたしかめました。正治は、大正16年ころ、数人の石工とともに、わずかなお金をもって荻野にやってきました。いつのまにか、荻野の石（緑色凝灰岩）は、荻野石として当時の建築ブームにのり、土台石や石倉の材料として知れわたり、とぶように売れていきました。最初は2～3人でのみをふるってほっていた石きり場は、佐藤石材株式会社となって、毎日貨車3輌くらいの石材を出すほどになりました。石工や職人たちも集まってきて、荻野はだんだん大きくにぎやかな町になっていった